

身体という受動性

細見和之

構造理解

次の空欄にあてはまる語句を本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

<p>第一段 (一四一・初め～一四二・三)</p> <p>人間は絶えず外部から「^①」を取り込まなければならないので、「^②」を他者性との関係で捉えるとき、身体や生命を無視できない。それは「^③」を特徴的に示すからである。</p>	<p>第二段 (一四二・四～一四四・三)</p> <p>少年と父の対話を軸にした散文詩『I was born』の中の少年は、生まれることが「^④」である理由をふと了解する。父は、短命である蜉蝣の雌の体が卵で充満していることに、「^⑤」が咽喉もとまでこみあげているように見える、という話を語る。少年の母は少年を「生み落として」すぐに死んだ。その母の胎内をふさいでいた自分、というイメージが少年の脳裏に焼きつけられる。</p>	<p>第三段 (一四四・四～一四五・九)</p> <p>身体や生命を思うとき、この詩が思い浮かぶのは鮮烈なイメージを喚起するからだ。子供は母親の生命を圧迫して育つ「^⑥」である。「母」は、自分自身の生命のイメージとしても浮かんでくる。自分では「^⑦」である。「母」は、自分自身の生命が、自分自身の身体を圧迫するように充填されているという意味において、身体と意識との関係は「受動性」を示しており、しかも私たちは「^⑧」を離れて存在しえないのである。</p>	<p>第四段 (一四五・10～一四六・8)</p> <p>「^⑨」の相貌を帯びる。「^⑩」が「自己」なのか「他者」なのか、「^⑪」のことで、しばしば意識を裏切る「^⑨」を離れて存在しえない。しかし答えようがなく、私たちは日常的に都合よく使い分けている。</p>
---	---	---	--

内容理解

次の各問いにそれぞれ答えなさい。

第二段(一四一・初め～一四二・三)

1 「アイデンティティーを他者性との関係で捉えるとき、この身体という次元を無視することはできない」(一四一・2～3)について、

(1) 「アイデンティティーを他者性との関係で捉える」とはどのようなことか。次の空欄にあてはまる語句を後ろの語群からそれぞれ選びなさい。

自分の「^①」にあるものが持つ「^②」との関係によって、「^③」というものがどう「^④」であるのかを自己認識するということ。

ア 身体 イ 生命 ウ 内部 エ 外部
オ 存在 カ 性質 キ 自分 ク 他者

(2) この部分の理由にあたる部分を「くから。」に続く形で本文中から抜き出して初めと終わりの五字を答えなさい。

くから。

2 「逆説」(一四一・6)とは、「ここではどのようなことを意味しているか。適切なものを次から選びなさい。」

ア 「私」と「他者」とは、対立する概念であるのに、その「私」が、「他者」の存在なしには維持しえないということ。

イ 「私」と「他者」とは、言葉の上では、全く異なる概念を表していること。

語句理解

次の各問いにそれぞれ答えなさい。

1 傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (1) 健康を維持する。
- (2) 徴兵を忌避する。
- (3) 考えが脳裏にひらめく。
- (4) 多様な相貌を有する。

2 傍線部の熟語を正しい漢字を使って書き改めなさい。

- (1) 奇妙な言い方。
- (2) 個有の存在感。

3 次の言葉の意味を書きなさい。

- (1) 契機
- (2) 理不尽
- (3) 庇護

ウ 「アイデンティティー」は、身体という次元を無視して考えることはできないのだということ。

エ 「私」と「他者」とは、対立する言葉のように見えるが、実は同じ意味を表す言葉であるということ。

3 「他者を取り込むということは……他者化されることもある。」(一四一・6)とあるが、この部分を端的に言い換えている部分を本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

から。

4 「僕らの存在につきまとう、ある『受動性』」(一四二・2)について説明した次の文の空欄にあてはまる語句を本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

僕らは「^①」という存在を、常に「^②」からの影響を受けて確かめているということ。

第二段(一四二・4～一四四・3)

5 「この発見」(一四三・1)の内容を、「く」という発見。」に続く形で詩中の語句を用いて簡潔に説明しなさい。

く

という発見。

